

七〇 夙興夜寐、孜孜矻矻、終年かくのごとく、終身かくのごとし。外間更に何事あるかを管せずして、心を一にし力を専らにし、只此の件を弁ぜん欲するのみ。則ち是れ豈にいわゆる培壅の厚きにあらざるや。

夙興夜寐、孜孜矻矻、終年如此、不管外間更有何事、而一心專力、只欲辨此件、則是豈非所謂培壅之厚乎、

【訳】朝は早く起き、夜は遅く寝て、怠けずにこつこつと勤める。一年間このように生活し、生涯このようにしていく。世間に何事かあってもかかわらず、心を一つのことに集中して、ただ学問を見きわめていききたいだけである。すなわち、これこそ草木を育てるのに、土を厚く培うようなものだ。

七一 時ありて静処に黙坐し、時ありて案頭に書を読む。而して「大学」に於ては、則ち古人、徳に入るの次第を觀、「語孟」に於ては、則ち日用踐履の実を要め、「中庸」に於ては、則ち聖学心法の訣あるを悟り、推して「六經」に遡れば、則ち工夫深広、規模濶大なり。亦、各要あれば、先輩の指揮に従い、必ず進みてこれを取り序に循う。則ち是れ豈にいわゆる灌漑の其時を得たるものにあらずや。(七一)

有時靜處默坐、有時案頭讀書、而於大學、則觀古人入徳之次第、於語孟、則要日用踐履之實、於中庸、則悟聖學心法之有訣、推而遡於六經、則工夫深廣、規模濶大、亦各有要、從先輩之指揮、必進取之循序、則是豈非所謂灌漑之得其時者乎、

【訳】時間があれば静かな所で黙座し、ある時は机に向かって読書する。それで、そうすると「大学」では、昔の人の徳の身につけ方を讀み、「論語」や「孟子」では、日々の行いのあり方を学び、「中庸」では、聖人の心身の修養の方法を体得し、さらに、「六經」(詩經・書經・礼經・樂經・易經・春秋)まで進めば、実践のあり方は深く広く、大変大きなものである。また、それぞれにその大事な点があり、先輩の指図に従って、これを自分に取り入れていく。すなわち、これこそ草木を育てるのに必要な時に必要な水をやるようなものだ。

七二 其の課を立つるや嚴ならんと欲し、其の力を用ふるや切ならんと欲

す。而して前面に効驗を求めず、速成を期せず、老いて益壯にして、直ただ自ら年歳の足らざるを知らざるなり。斃れて後止むの意あり。若し夫れ力を得るの浅深厚薄、建堅けんじゆの崇卑小大は、天下後世おのずか自ら公論ありて、吾の予知する所にあらざるなり。則ち是れ豈にいはゆる大成を以つて自ら期するものにあらずや。

其立課也欲嚴、其用力也欲切、而前面不求效驗、不期速成、老而益壯、

直不自知年歲之不足也、有斃而後止之意、若夫得力之淺深、厚薄、建堅之

崇卑小大、天下後世自有公論、而非吾之所豫知也、則是豈非所謂以大成

一自期者乎、

【訳】自分の課題をこなすには、厳しくし、それに力を入れるには懸命にやる。そして、前に効果が表れることを期待せず、はやく完成することも願わない。老いてもますます元気にして、ただ自分の年齢の足りないことを知らないで、死ぬまで一生懸命やるということだ。そういう力を出していることが、浅いとか深いとか自分に実力があるかどうか、高いとか低いとか大きいとか小さいとかは後生の評価をまつより仕方がないことで、私の知るところではない。こういうことが、自分は大成しなければならぬと心に期して、努力を続けているということではないか。

七三 夫れ「易」は神なり、至れり。蓋し当時羲皇の胸中、自ら無窮の蘊蔵あり。特象を借りて以つてこれを示すこと、猶ほ夫の釈迦文拈華微笑の為のごときなり。文周孔子これを玩ぶに及びても、亦敢へて饒舌多語せず。時に或ひは微を表して以つて学ぶもの自ら悟るを待つ。是の故に易を学ぶもの、言語を以つて知解すべからず。聴受して默観参透し体認切至せつしならば、或ひは以つて万分の一を窺うかがふに足らんか。

夫易神矣、蓋當時羲皇胸中、自有無窮蘊藏、特借象以示之者、猶夫積迦文拈華微笑之爲也、及文周孔子玩之、亦不敢饒舌多語、時或表微以待學者之自悟、是故學易者、不可以言語知解、聽受而默觀參透、體認切至、或足以窺萬分一乎

【訳】易は神であり、すべての究極である。思うに易を作った当時羲皇(伏羲)の胸の中には、無限の現象や因果や秩序や思いがあっただろう。ただ、形をもってこれを他の人に示すことは、あの釈迦が花をひねって、魔訶迦葉がこれを理解して微笑んだというような以心伝心のできる人だけが、わかるというようなものである。文王、周公、孔子が易を深く味わい研究し人々に示そうとしたが、それでも敢えて多くの言葉で語ろうとはしなかった。その奥深い易の一端を示して学ぼうとする者が自分で悟るのを待つというものであった。だから、易を学ぶ者は言語で理解してはいけない。心で聞き受け入れて黙ってわが身にしみ込ませ、体で感じて体でわかるようにすれば、或いはその万分の一でもわかるかも知れない。

七四 言を以って示すものは浅く、象を以て示すものは深し。「易」はいはゆる象を以つて示すものなり。是の故に文王これを解きて足らず、周公又従ひてこれを解く。周公これを解きて足らず、孔子又従ひてこれを解く。いはゆる一番拈出し、一番新しきものなり。今よりして往、若し或ひは夫子を継ぎて起るものあらんか、則ち安くんぞ更に復た別に一般の見解あらざるを知らんや。蓋し理の窮尽なきこと、かくのごときものあり。

以言示者淺、以象示者深、易所謂以象示者也、是故文王解之不足、周公又從而解之、周公解之不足、孔子又從而解之、所謂一番拈出、一番新者、自今而往、若或有繼夫子而起者乎、則安知更不復別有一般見解、蓋理之無窮盡、有如此者、

【訳】言葉で説明するものは浅い。形で示すのは深い。「易」は、いわゆる形を持って示すものだ。だから、文王はこれを説いて示したが、物足りなかった。ついで、周公が、またこれに続いて解いて示したが、物足りなかった。孔子もこれらに続いて解いた。このように言葉で説明する毎に新しくなっていき、これが一番新しい。今後、あるいは孔子を継ぐ者があるとしても、別にあらたな見解があることを知ることはできないだろう。理論の極まり尽くすことのないことは、このようなことがある。

七五 経を説くことは難し、而して易を説くことは尤も難しと為す。蓋し象の含む所のは広し。而れども言を以つて發揮するものは、特一端に過ぎざるのみ。聞くものこれに執すれば則ち失ふ。然れども説かざれば則ち以つて後学を導くに足らず。而してこれを説けば則ち亦是くのごときの弊あり。難しと為すゆゑなり。

説經難、而説易爲尤難、蓋象之所含者廣矣、而以言發揮者、特不過一端、聞者執之則失矣、然不説、則不足_ニ以導後學、而説之、則亦有如是之弊、所_ニ以爲難也、

【訳】経書を解説するのは難しい。中でも、「易」を解説するのは一層難しいと言わざるを得ない。「象」に含まれる内容は広い。だが、言葉で言い表せるのはその一端にしか過ぎないのである。聞く者が言われた言葉に固執すれば、正しい理解を失う。しかし、言葉で説かなければ、これから学ぶ者たちを導くことができな。かといって説けばこのような弊害がある。説くことが難しいわけがある。

七六 春は桜花を尋ね、夏は涼風を趁い、秋は月光を弄ぶ。転眇倏忽の

間、徒爾いたずらに一歳の光陰を過おごし了はる。今歳此かのごとく、明歳又此かのごとく、到頭果たして是れ何の得る所ぞや。愴然そうぜんとして一嘆す。

春尋三櫻花、夏趁三涼風、秋弄三月光、轉眄倏忽之間、徒爾過三了一歳之光陰、今歳如此、明歳又如此、到頭果是何所得乎、愴然一嘆、

【訳】春は桜の花見をし、夏は涼しい風を求め、秋は、月光を眺めて楽しむ。瞬時にして、いたずらに一年間が終わってしまったている。今年このようであったが、来年もこのようであれば、つまるところ果たして、私は何をしていることであるうか。悲しみに心を痛めては溜息をつく。

七七 比日ひじつ、体佳よからず、因よつて夜熟睡する能あたわず。枕上ちんじょうひそ竊かかに平生へいぜいの業とする所を回思かいしすれば、鹵莽滅裂ろうもうめつれつ、殊に章を成さず。此れを持して古人を望めば、則ち邈焉ぼくえんとして夙絶けいぜつし、猶ほ天の、階のぼして升るべからざるがごときなり。是に於いてか勃然ぼつぜんとして興起こうきし、殆ど旧痼きゅうゑんの身に在るを忘る。

比日體不佳、因夜不能熟睡、枕上竊回思平生之所業、鹵莽滅裂。殊不成章、持此望古人、則邈焉夙絶、猶天之不可階而升也、於是乎勃然興起、殆忘舊痼之在身、

【訳】近頃、体の調子がよくなく、それで夜も熟睡することができない。寢床で休みながら、普段自分のやっている講義や指導について思い返してみると、粗雑でお粗末で、いいところはなにもない。このことをふまえて、昔の人のことを考えると、遙かに遠く及ばず、それは天に梯子をかけて昇ることができないことと同じようなもので、とても及ばない。そう思うと、にわか奮いたち、自分の体の調子がよくないことを忘れてしまう。

七八 天地万物は此くのごとく其れ夥おびただし。而るに人の其の間に於けるは

猶ほ倉廩そうりんの一粒の米のごとし。則ち此の身は豈に珍重すべきことの甚しからずや。然れども褻弄せつろう慢侮まんぶして、以つて一生を誤る。果して是れ誰の罪ぞ。豈きに愧死きしせざらんや。

天地萬物如此其夥、而人於其間、猶倉廩之一粒米、則此身豈不可珍重之甚乎、然褻弄慢侮、以誤一生、果是誰罪、豈不愧死、

【訳】宇宙にはたくさんの方切れない程のものがある。人はその間にあつては、米倉の中のたった一粒の米のようなものだ。だからこの一人の身は大変尊重しなければならぬ。しかし、身をもてあそび、あなどっていると、自分の一生を誤ってしまうだろう。これは誰の罪であるか。まことに深く恥じることだ。

79 (2016/5/14)

七九 怒りの克かち難がたきは、猶お烈火の撲滅ぼくめつし易からざるがごときなり。克かちち得ること容易ならば、乃ち其の勇を見る。

怒之難克、猶烈火之不易撲滅也、克得容易、乃見其勇、

【訳】怒りの心に打ち克つことが難しいのは、烈しく燃えさかる火を消すのが容易ではないのと同じようなものだ。怒りの心に打ち克つことが容易でなければ、それのできる人は、勇気があるということだ。

八〇 古人は何の故に常に卑近の処より説き起すや。今人は何の故に常に高遠の処より説き去るや。知るべし、古人の言語は皆実なれども、今人の言語は皆虚なるを。此れを以つて驕を生じ慢を生じ、前人の上に駕せんと欲す。抑おさ其そのの自せい量りょうらざるを見るなり。

古人何故常從卑近處説起、今人何故常從高遠處説去、可知古人之言語皆實、而今人之言語皆虚、以此生驕生慢、欲駕前人之上、抑見其不自量也、

【訳】昔の人はどうしていつでも身近なところから説き起こしているのだろう。

今の人はどうしていつでも高遠なところから説き起こすのだろうか。知らなければならぬ、昔の人の言葉は皆現実のことだが、今の人の言葉は皆虚妄だ。だから驕りや慢心が出てきて、前の人を乗り越えようとしている。そもそも、自分の力量を知らないことを表している。

八一 世人好みて雅俗の二字を言ふ。畢竟、何物か真に是れ雅なる、何物か真に是れ俗なる。皮相上よりこれを弁ずれば則ち易く、肺腑上よりこれを弁ずれば則ち難し。昔人、程子を評し、「纔かに以つて俗ならず」と為す。然らば則ち俗の一字は甚だ免れ難く、而して雅の一字は承当し易からざるを知るべきなり。

世人好言雅俗二字、畢竟何物眞是雅、何物眞是俗、從皮相上辨之則易、從肺腑上辨之則難、昔人評程子、纔以爲不俗、然則可知俗之一字甚難免、而雅之一字不易承當也、

【訳】世間の人は好んで、「優雅だ、卑俗だ」と言う。しかし、何が真の雅で、誰が本当に俗であるか、わかっているだろうか。うわべだけ見てこれを言うことはたやすいことであるが、内面を見きわめてこれを言うことは難しいことである。昔の人は、北宋の仁徳者であり大学者であった程兄弟を評価して「わずかではあるが、俗ではない」と言っている。ということからも、そもそも俗とはなかなか逃れられないものであり、雅に当てはまることはたやすいことではないということを知っておかなければならない。

八二 「百世に奮ふの志を立て」、「未だ郷人たるを免れざるの恥を懐ふ」と。此れぞ是れ古昔、志ある者の語。俗を免るるの機ありと謂ふべし。

立奮乎百世之志、懷未免郷人之耻、此是古昔有志者之語、可

謂有免俗之機矣、

【訳】孟子の言葉に「百世の後に生きる者たちを振り動かすような志を持ち」、「まだ、俗人であることを免れないことを恥ずかしく思う」と。これこそが、遠い昔から、志がある者の言葉だ。こういう人が、俗から免れるきっかけがあるというべきだ。

八三 志氣一たび奮へば、則ち万夫も避くるなし。前面何ぞ復た艱阻の言ふべきあらん。然らざれば、則ち培塿曲径も、亦皆隔礙と成り、消沮屏息して、氣を出だす能はず。豈に以つて男子の眉目に愧ぢざらんや。

志氣一奮、則萬夫莫避、前面何復有艱阻之可言、不然、則培塿曲徑、亦皆成隔礙、消沮屏息、不能出氣、豈不以愧男子之眉目乎、

【訳】志をひとたび奮い起こせば、何人も避けて通るような障害はなくなる。前面に立ちほだかるものはなくなる。志が奮わなければ、小高い丘や曲がった道も皆妨げとなり、意気が消沈し、縮こまって勇気をだすことができなくなる。こんなことであれば、男子の面目に恥じるものだ。

八四 雪霜摯ばず、枝葉枯れざれば、則ち以つて来歳發生の機を振るうなし。然らば則ち声華を刊落し、攻苦して淡を喫い、一意、道に向かうもの、豈に以つて後來の造就を庶幾するに足らざらんや。

雪霜不摯、枝葉不枯、則無以振来歳發生之機、然則刊落聲華、攻苦喫淡、一意向道者、豈不足以庶幾後來之造就乎、

【訳】雪や霜に覆われることがなくて、枝葉が枯れて落ちなかつたら、翌年樹は芽をつけることもない。そうであるから、華やかな名声を捨て、苦心して勉強し、ただそれだけの道に進むものは、将来自己を完成する期待が持てるというものだ。

八五 一物を知らざるを以つて恥と為す。此れぞ是れ学者の陋習ろうしゅうなり。蓋し天下古今其の事また夥おびただし。而今、一箇の身子、三五年の精力を以つて、悉くこれに通じ知らんと欲するは、自ら量らざるの至りと謂ふべきなり。而して其の氣象も亦深く局促きよくそく迫隘はくあいなるを覚ゆ。

以一物不知爲耻、此是學者之陋習、蓋天下古今其事亦夥矣、而今以一箇之身子三五年之精力、欲悉通知之、可謂不自量之至也、而其氣象亦深覺局促迫隘、

【訳】ある一つの物事を知らないことを恥とする。これは、学者のいやな慣わしである。このことは世間に昔からたくさんある。しかし、一個人が三十年五十年の月日、精力をかけて、残らず知ろうと願うことは、自分の力量を知らないということだ。また、その人の性格は狭く、縮こまっつてると感じられるものだ。

八六 一物を知らざるを以つては恥と為すは、是れ特恥ただの小なるもののみ。蓋し恥には此れより大なるものあり。今、大恥を恥ぢずして、小恥を以つて恥と為すは、いはゆる其の恥づべきを恥ぢずして、恥づべからざるを恥づるものなり。是れ乃ち恥の免れざるゆゑなり。

以一物不知爲耻、是特耻之小者、蓋耻有大於此者、今大耻之不耻、而以小耻爲耻、所謂不耻其可耻、而不可耻之耻者、是乃耻之所以不免也、

【訳】ひとつの事を知らないで、そのことを恥と感ずるのは、恥のうちでもほんの些細なことである。恥にはこれより大きなものがある。今、大きな恥を恥としなくて、小さな恥をもって恥とするのは、恥じなければならぬことを恥じず、恥じる必要のないことを恥じていると言つてよい。このことが、恥の恥じたるところだ。

八七 身は妄みだりに動かず、言は妄みだりに発せざれば、敦厚とんこうの士と謂ふべし。

身不_二妄動、言不_二妄發、可_レ謂_二敦厚之士矣、

【訳】身はみだりに動かさず、言葉はみだりに口にしなければ、篤実で心が厚い人と言える。

八八 「人譜」の一書は、念_{ねん}臺_{だいら}劉_{りゅう}子_しの著はす所なり。念_{ねん}臺_{だいら}劉_{りゅう}子は、食を絶ち国に殉ずる忠節の士なり。則ち其の著はす所の書は、敬せざるべからざるなり。

人譜一書、念_{ねん}臺_{だいら}劉_{りゅう}子_し所著、念_{ねん}臺_{だいら}劉_{りゅう}子_し、絶_{ぜつ}食_{じき}殉_{じゆん}國_{こく}、忠_{ちゆう}節_{けつ}之_し士_し也、則_{すなは}其所_こ著_{しやく}之_し書_{しよ}、不_レ可_レ不_レ敬_{けい}也、

【訳】「人譜」という書物は、念_{ねん}臺_{だいら}劉_{りゅう}子_しの著作である。念_{ねん}臺_{だいら}劉_{りゅう}子_しは、食を絶つて国に殉じる忠節心の高い男子である。念_{ねん}臺_{だいら}劉_{りゅう}子_しの著書は、尊敬せずにはおれない。

八九 山に登り水に臨_{のぞ}む、此れぞ是れ吾_{われ}が輩_{はい}閑_{かん}人_{じん}の事_{こと}なり。

登山臨水、此是吾輩閑人之事、

【訳】山に登ったり、川の側に立ったり、これこそ私のような暇のある者のする事である。

(20160604) 90

九〇 心は本_{もと}是_{こゝ}れ不_ふ動_{どう}、氣は本_{もと}是_{こゝ}れ浩_{こう}然_{ぜん}たり。然_{しか}り而_{しか}して餒_{がい}を免_まれざるは、方_{まさ}に心に慊_{けん}ならざる所_{ところ}のものあればなり。是_{こゝ}の故_{ゆゑ}に日用_{じつよう}の間_ま、事_{こと}毎_{ごと}に反_{かえ}求_{もと}し、務_{つと}めて道_{みち}理_りを尽_{つく}くし、愧_き怍_{さく}する所_{ところ}なければ、則_{すなは}ち心_{こゝろ}は其_{その}の不_ふ動_{どう}に還_{かえ}り、氣_きは其_{その}の浩_{こう}然_{ぜん}に還_{かえ}る。前_{まへ}面に_{めん}に仮_た使_し山_{さん}崩_{くずれ}れ海_{うみ}倒_{たふ}れ、極_{ごく}めて是_{こゝ}れ驚_{おど}くべきも、我_{われ}にありては只_{ただ}一_{いつ}箇_この処_{ところ}置_おきあり、断_た定_{てい}して移_{うつ}らず。何_{なに}ぞ復_{また}た疑_ぎ懼_く迷_ま惑_{くわく}の言_{こと}ふべきものあらん。此_{こゝ}れぞ是_{こゝ}れ孟_{もう}子_しの平_{へい}生_{せい}学_{がく}問_{もん}力_{りき}を得_えるの処_{ところ}なり。

心本是不_レ動、氣本是浩_{こう}然_{ぜん}、然而不_レ免_ま於_お餒_{がい}者_{しや}、方_{まさ}有_あ所_{ところ}不_レ慊_{けん}乎_{こゝ}心_{こゝろ}者_{しや}也、是_{こゝ}故_{ゆゑ}

日用之間、每事反求、務盡道理、無所愧怍、則心還、其不動、氣還、其浩然、前面假使山崩海倒、極是可驚、在我只有一箇處置、斷定不移、何復有疑懼迷惑之可言、此是孟子平生學問得力之處、

【訳】心は本来不動のものである。気力は本来充実したものである。しかし、何か満たされないものがあるのは、心に満足できるものがないからである。だから、日々事ある毎に反省し、道理を尽くし、恥じ入るところがなければ、心は不動のものとなり、気力は充実したものにできる。たとえ、目の前で山が崩れ海が荒れ狂っても、それは驚くことかもしれないが、私にとっては単なる一事でしかなく、何ら心が動じるほどのことはない。また、何らうたがい恐れて迷うこともない。こういうことが、孟子の言う学問によって力を得るということだ。

九一 学は自得せんことを要す。蓋し心中に自得すれば、則ちこれを言語に発するものは自ら別なり。是の故に尋常に経を説けば、則ち善く聖賢の微意を發揮し、人をして興起する所あらしめ、而も人の善を誘い、人の過ちを規せば、藹然として亦猶お和氣の、人を襲うがごとく、感悦心服すること、然るを期せずして然るものあらむ。

學要 自得、蓋心中自得、則發之言語、者自別、是故尋常說經、則善發、揮聖賢之微意、使人有所興起、而誘人之善、規人之過、藹然亦猶和氣之襲人、感悦心服、有不期然而然者矣、

【訳】学問は自分の心と体を通して身に付けるものである。それができれば、言葉で説明することができるかどうかは、別のことである。だから、そのでできる人が教えを説けば、よく聖賢の奥深い意味を示すことで、他人を奮い立たせることになり、その上、人によい行いを勧めることになる。人の過ちを正せば、気持ちちが和らぎ穏やかにして、さらにその上、和やかな気分が広がり、深く喜び心から尊敬し従うようになる。このようなことは、期待しないで自然にそのように成るものである。

九二 経を説くの道は、博引旁搜を要せず、又鋪張太過なるを要せず。而して要は身を以つてこれを体し、意を以つてこれを認め、当時の聖賢の意味気象を得るにあり。蓋し聖賢の意味気象は、元來聖賢にあらずして、自己の胸中にあり。ただ体し得て透り、認め得て真なるを要す。則ち説く所

は仍^{すなわ}ち是れ聖賢の書なりといえども、却つて是れ皆自家屋裏の話にして、融液流通^{ゆうえきりゆうつう}し、精神活発にして、復た陳腐^{ちんぷ}の氣あることなく、世の窮経家と別なり。

說經之道、不要博引旁搜、又不_レ要鋪張太過、而要在_レ以身體之、以意認之、得_レ當時聖賢之意味氣象、蓋聖賢之意味氣象、元來不_レ在_レ聖賢、而在_レ自己胸中、只要_レ體得透認得眞、則所_レ說雖_レ仍是聖賢之書、却是皆自家屋裏話、融液流通、精神活潑、無_レ復有_レ陳腐之氣、與_レ世之窮経家別、

【訳】 經典を説く方法は、多数の資料を集め引用したり、過度の誇張をしたりすることは必要ないことだ。では何が必要かといえば、經典の説くところを身を以て体現し、主体的に受容して、当時の聖賢の思念のありよう、心のありようを自分のものとすることである。この聖賢の思念のありようとは、聖賢のものではなく、今私自身の胸中に元々あったのである。体現することで明瞭に理解し、思念して認めることで真理とせねばならない。つまり説いて教えるのは聖賢の書ではあるが、これはすべて自分の胸中のことであり、その教理は血液のように、体をめぐり、精神を活発にし、同じようなことを繰り返すようなこともなく、それは世間に見られる經典研究家の説くところとは別のものである。

九三 学ぶものは事を厭^{いと}い^どを辞すべからず。事を厭^{いと}い^どを辞し、清閑^{せいかん}日を渡^{わた}れば、則ち古人のいわゆる間を積み^たて^て懶^{らん}を成し、懶^{らん}を積み^たて^て散をなすもの。到底、終^{つい}に是れを用うる処なし。此^かのごときの学は甚^{はな}だ人を誤る。

學者不可_レ厭事辭_レ勞、厭事辭_レ勞、清閑度_レ日、則古人所謂積_レ間成_レ懶、積_レ懶成_レ散、到底終_レは無_レ用處、如_レ此之學甚_レ誤人、

【訳】 学問をする人は、仕事や労働をめんどろがったり、いやがったり、拒んではならない。雑用をいやがり、働くことをめんどろがってのんびりと日を過ごしているのは、昔の人が言っているように、その日々の中で怠け始め、それが重なって何事もいいかげんになる。こうなると、何のとりえもなく人としての使い道

がなくなる。体を動かして何かをすることをめんどろがったり、働くことをいやがって学問する人は、人生を誤ってしまうものだ。

九四 日用の間、柴を運び泉を汲み、務めて労働の事を為す。柔懦は是れに因りて嬌められ、宴安は是れに因りて戒められ、気体は是れに因りて健に、筋力は是れに因りて固ければ、則ち異時家に当り物に接し、災いに遇い変に应ずるも、固より為し難きことなし。此れぞ是れ山間の講学教養の微意なり。

日用之間、運柴汲泉、務爲_二勞動之事、柔懦因_一是矯、宴安因_一是戒、氣體因_一是健、筋力因_一是固、則異時當家接物、遇災應變、固無_二難爲者、此是山間講學教養之微意、

【訳】 日常からたき木を運んだり、水を汲んできたり、進んで家の仕事をする。こうすることによって、弱気は直り、浮かれて遊びたい気持ちは戒められ、心身はこれによって健やかになり、体は強くなって、いつか家の仕事を継いだり、何かしなければならぬとき、いろんな困難に出会ってもやれないということはない。これこそ、この山あいで学問する事のねらいである。

九五 書を読むと事に应ずると、判ちて二物と為すは、是れ学者の弊なり。古人云わずや、「事を執りて敬」と。苟くも此の処より功夫を下さざれば、則ち仮令万巻の書を読破すとも、究竟更に一字の用処なし。

讀書與應事、判而爲_二二物、是學者之弊、古人不_一云乎、執事敬、苟不_一自此處下_二功夫、則假令讀_二破萬卷之書、而究竟更無_一一字用處

【訳】 書物を読むことと、日常の仕事をしていくことを、二つに分けて考えるのは、学者の陥る誤りである。昔の人（孔子）が言ってるではないか。「日常の仕事をするときには、心を込めて慎んで行わなければならない」と。仕事することにおいて、思量をめぐらしてよく考えるということをしなかったら、たとえ、沢山の書物を読んだとしても、結局のところ、その中の一字として役に立つことはない。

九六 机に対すれば、則ち筆硯齊整し、食に向かえば、則ち菜羹定位あり。臥起坐立し、手を挙げ歩を移す、瑣屑微末の間にも、肅然として敬せざるなきなり。此れぞ是れ当下切実、至近至易の学問なり。(九六)

對机、則筆硯齊整、向食、則菜羹定位、臥起坐立、擧手、移歩、瑣屑微末之間、無不蕭然而敬也、此是當下切實至近至易之學問、

【訳】机に向かえば、筆や硯はきちんと整えて置き、食卓に向かえば、副食物やお汁はきちんと決まった所に置く。日常の寝たり起きたり立ったり座ったり、手を上げたり、歩いたりする小さなわずかなことにも、気持を引き締め、大事にしていかなければならない。これこそ、今すぐに、やらなければならぬ、身近で、それでも取り組める学問である。

九七 山間に今日、学を講ずるの様子は、即ち是れ異時、親に事へて盡を幹し、君に事へて力を效す。終身の功業、成敗利鈍の規模、山人、此れを以つて人を鑑み、万、其の一を失はざるなり。

山間今日講學之様子、即是異時事親幹盡、事君效力、終身功業、成敗利鈍之規模、山人以此鑒人、萬不失其一也、

【訳】この山あいで今日も、学問を講義するのは、将来、親の失敗を子がつくり、親が成しえた仕事を受け継いでよく果たすこと、また、徳や知のすぐれた人に仕えて力を尽くすためである。一生を終えるまでに成し遂げたことや失敗、うまくいったかどうかなど、わたしは人を見て見誤るようなことはないだろう。

九八 世の学者は、ややもすればすなはち謂へらく、「専ら経を治めて、史を読まざれば、則ち其の失や迂」と。此れ蓋し善く経を治めざるものなり。亦深く聖人を信ぜざるものなり。夫れ聖人にして聡明叡智ならざれば、則ち已む。苟くも聖人にして聰明睿智なれば、則ち豈に復た専ら経を治めて迂に流るるものあらんや。

世之學者、動輒謂、專治經、而不讀史、則其失也迂、此蓋不善治經者也、亦不深信聖人者也、夫聖人而不聰明睿智、則已、苟聖人而聰明睿智、則豈復有專治經而流於迂者哉、

【訳】世間の学者は、ややもすれば「専ら経書だけを治めて、歴史書を読まなければ、その欠点はまわりくどいことである」と考えている。しかしこのように考える者は、大概十分に経書を治めていない者である。又深く聖人を信じていない者である。聖人は聡明で睿智がなければ、聖人ではない。聖人が聡明で睿智であるなら、どうして四書五経を治めて、遠回りして回りくどくなったりするだろうか。

99 (160903)

九九 頼子成の画一幅、此れぞ是れ子成の崎陽僑居中に作りしところなり。上頭に自ら其の、意に称ふを題す。蓋し子成、鎮西に遊びしとき、甚だ耶馬溪の勝を賞す。則ち此の画く所の奇峰の、天を突くの勢ひ、むしろ其の当時曾つて見し所のものか。明窓の下、酒に乘じ毫を揮ひ、以つて一時の興を遣り、これを世間に伝ふ。極めて把玩するに勝ふ。

頼子成畫一幅、比是子成崎陽僑居中所作、上頭自題其稱意、蓋子成遊鎮西、甚賞耶馬溪之勝、則此所畫奇峯突天之勢、無乃其當時所曾見者乎、明窓之下、乘酒揮毫、以遺一時之興、傳之世間、極勝把玩、

【訳】頼子成（江戸時代の儒者）の絵の一つがある。これこそ子成が長崎の崎陽での旅住まいの時に宿で描いたものである。上頭には自分の思いになつたものと記してある。おそらく子成が、鎮西で学んでいたときに、耶馬溪のすばらしい景勝に感嘆したものである。つまり、この絵の珍しい形の峰が天を突く勢いで描かれているのは、かつて見たところのものだろう。開け放たれた窓の下で酒を飲み、心のままに筆をふるい絵を描き、ひとときの癒やしを味わいつつ作品を世に伝えたかったのだ。味わい深く賞賛するにふさわしい素晴らしい絵である。

一〇〇 人は智あらざるなきなり。而してこれを用ふれば則ち明らかに、用ひざれば則ち暗し。

人無不有智也、而用之則明、不用則暗、

【訳】 人には知恵がないということはない。だからこれを使えば物事が明らかに、使わなければ分からないことが多く、迷うのだ。

一〇一 寒を忍び苦を忍び、毎夜孤燈の下に就いて、孜孜として書を読む。極めて其の志あるを見る。

忍寒忍苦、毎夜就孤燈之下、孜孜讀書、極見其有志、

【訳】 寒さに耐え、苦勞を忍んで、每晚一人灯火のもとで、静かに一心に書物を読む。こういう姿勢に学に志す気概を感じる。

一〇二 仁義より拮めてこれを充たせば、則ち堯舜の事といへども、亦吾が分内なり。

自仁義擴而充之、則雖堯舜之事、亦吾分内也、

【訳】 仁義を世の中に広めてそういう世の中になれば、それは堯舜の時代のことだと言うが、今自分も目指していることだ。

一〇三 「易」は以つて天下の疑を断じて、以つて天下の務を成す。「書」は以つて万古經濟の大法を垂る。「詩」は則ち人情物理の纖悉く遺すなし。「礼」は則ち規矩嚴正、物、これを則と為す。「春秋」は則ち名

分を明らかにし、せんらん僭亂を匡し、以つて綱常を既滅に存す。凡そ天下の事、もうらしゆうしよう網羅周詳、たんにきよくじん端委曲尽す。聖賢の能事畢れりと謂ふべし。

易以斷天下之疑、以成天下之務、書以垂萬古經濟之大法、詩則人情物理纖悉莫遺、禮則規矩嚴正、物爲之則、春秋則明名分、匡僭亂、以存綱常於既滅、凡天下之事、網羅周詳、端委曲盡、可謂聖賢之能事畢矣

【訳】「易経」は天下万民の疑問を解決し、そのなすべき務めを成就させる。

「書経」は、世を治め民を救う普遍的な法を述べる。「詩経」は人の情、物の性質を余すところなく細やかに表現する。「礼記」は、厳正な規則を示しており、万物はこの規則に従っている。「春秋」は、人の身分地位とその守るべき本分を明らかにし、これを逸脱して秩序を乱すことを正し、綱常をいつまでも保ち今に伝え蘇らせる。これらのものは、世の中の全てを残らず集め細部まで詳しく説き尽くしている。これらを身につけて、聖賢は、その為すべきところをすべて為し終えていると言うことができる。

一〇四 学ぶ者経を治めて、看得爛熟すれば、力を得る所あり。推して史に及べば、則ち平生見る所の理、一一これを千古の事変に徴すること、ちゆう龜卜数計のごとく、毫髪も差はず。而る後、吾の知識は精達磨鍊し、益ますます自ら信ずるゆゑんものあり。異時、挙げてこれを家國天下に措かば、則ち沛然として礙なく、綽然として余りあらん。功成り名立ち、必定朽ちざらん。是れ古来賢人君子の学を為すゆゑんものなり。

學者治經、看得爛熟、有所得力、推而及史、則平生所見之理、一々徴之於千古之事變、龜卜數計、不差毫髮、而後吾之知識精達磨鍊、益有所以自信者、異時舉而措之家國天下、則沛然無礙、綽然有餘、功成名立、必定不朽、是古來賢人君子之所、以爲學者也、

【訳】学問する者は、四書五経を習得して、さらによく読んで理解していけば、

自分の力となっていく。さらに進めて歴史書を及んで、平生の出来事の根本を、一つ一つを長い歴史の中の事例に照らしてみれば、すべてが明確となり、少しも間違うところない。そうして、自分の知識を細かく磨きをかければ、ますます自信も深められるというものだ。将来、これを天下国家のことに置きかえてみれば、すつきりとして妨げるものもなく余裕すら出てくる。学ぶ人は、成功を修め、朽ちることがない。昔から賢人君子が学問をするのは、このためだ。

一〇五 歳已すでに晩に向ふ。終年の為す所を回顧するに、悠悠ゆうゆう忽忽こつこつ、大抵多はくは夢中より過ぐ。今歳こんさい此かくのごとく、明歳又此くのごとし。此の生、将はた何の成す所ぞ。これを懐おもへば慨然がいぜんとして、覺えず涙下る。

歳已向晩、回顧終年之所爲、悠々忽々、大抵多自夢中過、今歳如此、明歳又如此、此生將何所成、懷之慨然、不覺淚下、

【訳】歳はもう老年になってきた。生涯してきたことを振り返ってみると、ろくろく仕事もしないでのんびりと過ごし、ほとんどのことは夢の中のことのように過ぎてしまっている。今年このようであれば、来年もまたそうなるだろう。こうして生きていて、何ができるといふのか。これを思うと、悲しく嘆くばかりで、思わず涙が落ちる。

一〇六 日暖く雪消え、風氣微和たり。南窓の下、坐して悠然の思ひあり。
辛酉しんゆう

日暖雪消風氣微和、南窓窓下、坐有悠然之思、辛酉

【訳】陽光が暖かくなって雪が消え、風も穏やかになってきた。南側の窓際に座って悠然と思いを巡らしている。文久元年（一八六一）（48歳）。

一〇七 盤中に梅を植え、寒を避け暖に就かしむ。一冬の間、意を著けて

これを養へば、則ち其の花を發する早し。乃ち造化の為といへども、亦以つて培養の闕くべからざるを見るなり

盤中植梅、避寒就暖、一冬之間、著意養之、則其發花也早、乃雖造化之爲、而亦以見培養之不可闕也

【訳】水盤に梅を活け、寒さを避けて暖かなところに置いておく。冬の間気持ちこめて養生すれば、梅の花の開花が早くなる。花が咲くのは自然の為すところであるが、草木を養い育てるには、このように気持ちをこめて養生することが欠かせないことだということが分かる。

一〇八 其の花や清冷、其の香や幽遠なり。これを百草凡卉の中に錯けば、迴然として自ら其の品の同じかるべからざるを覚ゆるなり。

其花也清冷、其香也幽遠、錯之乎百草凡卉之中、迴然覺自覺其品之不可同也、

【訳】その花はすがすがしく、その香りは落ち着いていて奥深い。それをたくさんの草花の中に置けば、永遠のものを感じ、これと同じようなものはないと思えてくる。

一〇九 炉中炭を焼き、泉を汲み茗を煎じ山妻稚兒相集ひて情話すれば、未だ性を割き鮮を撃つの樂みあらずといへども、亦幸に分離睽絶の憂ひ無し。此れぞ是れ山間逸入の清福なり。豈に以つて天公の賜に謝せざらんや。

爐中燒炭、汲泉煎茗、山妻稚兒相集情話、雖未有割牲擊鮮之樂、而亦幸無分離睽絶之憂、此是山間逸入之清福、豈不以謝天公之賜也乎哉、

【訳】囲炉裏に炭を燃やし、泉から水を汲み、茶を煎じ、妻子相集い、心のこも

った話しをすれば、未だ食膳に用いる動物の新鮮な肉を食べる楽しみはないけれど、幸せなことに家族の心が離ればなれになる心配はない。これこそ、山間で世を逃れるように住んでいる者の清らかな幸福である。こうして、大いなるものの恵みに感謝しないことがあるのか、いや感謝している。

一一〇 毎旦まいたん、鶏鳴きて起き、香を焚たき宴坐えんざし、床に対して書を読み、時に随ひて警省し、処に随ひて進取し、以つて日暮に至る。古人云はずや「善を為すこと最も樂し」と。誠なるかな此の言や。

毎旦鶏鳴而起、焚香宴坐、對床讀書、隨時警省、隨處進取、以至日暮、古人不云乎、爲善最樂、誠哉此言也、

【訳】毎朝、鶏が鳴いて起き、香を焚いてくつろいで坐り、床の間に向かって書物を読み、その時々自分を省み、どこでも自分から進んで善を追求し、そして夕方になる。孔子が言っている。「善を為す事こそ最も楽しいことだ」と。この言葉は、本当のことだ。

